

当館収蔵のカメラコレクションについて

*豊川 公裕

Kimihiro TOYOKAWA

概要：当館の収蔵資料は「産業技術資料」という言葉で括られるが、これまで常設展示物のほか企画展・特別展等において展示した資料の一部が集積されてきたことにより、その収蔵資料は着実に増えてきた。しかし近年、一度に大量の資料群を受け入れる機会が重なり、特にカメラ資料の蓄積が著しいために収蔵資料の構成に大きな変化が表れてもきている。そこで、その核ともいえる佐々木智夫氏旧蔵の「佐々木コレクション」及び小久保勝弘氏旧蔵の「小久保コレクション」（一次受入分）について、その資料整理の経過と資料群の概要を紹介し、今後の資料活用を図るため、目録を公開するものである。

キーワード：科学館資料 カメラ コレクション

1 はじめに

千葉県立現代産業科学館（以下、当館と略す）は、平成6年（1994）の開館以来、「産業に応用された科学技術」を全体テーマ（1）として、「現代産業の歴史」「先端技術への招待」「創造の広場」という三部門からなる常設展示に加え、毎年、特別展または企画展を開催してきている。

当館における収蔵資料は、その多くが開館までの製作または購入・寄贈によるものであり、平成19年度末の収蔵資料点数（整理済み。寄託を含む）2,096点のうち、900点は開館前の平成5年度収蔵（受入）分である（一部廃棄資料を含む）（2）。つまり、開館に伴う資料収集または製作を進めていた際に集積されたものであり、これらの資料は、一部の展示入替分を除いて常設展示物として現在も入場者の方々の目に触れたり、体験してもらったりしている「現役」の資料でもある。

さて、前段において「当館における収蔵資料は、その多くが開館までの製作または購入・寄贈」と書いたが、約2,000点のうちの半分程度ではないか、との御指摘も受けそうである。確かに現時点では全収蔵資料点数の半分程度に割合を下けているが、平成15年度までは、当時の収蔵資料点数が1,062点であったと聞けば、この時点では収蔵資料のほとんどが開館までに収蔵した資料で占められることが首肯できよう。こうして見ると、当館

では開館までに収蔵した資料はほとんどが常設展に展示するのを目的としたものであった。言い換えるなら、収蔵庫に保管されている資料はほとんどなかったということである。このことは、文化財として保存を前提とした収蔵資料というより、実験装置をはじめとする体験的資料、復元資料が大半を占めるという種別構成からも頷けるところである（平成5年度収蔵資料900点のうち、受入形態による内訳は、実物資料の範疇に含まれる購入資料が28点、寄贈資料が205点であり、それ以外は開館に伴う委託製作資料及び実験装置等の新規製造資料ともいうべきものであった）。それから平成15年度までは、各年の特別展や企画展で購入・製作した資料や借用した資料が所有者の御厚意で寄贈資料となったものが収蔵資料点数の増加につながってきたのであり、よって各年の受入点数も、平成6年度の78点を除けば、多くても平成13年度の21点、少ない年度で平成10年度の1点という程度のものであった。平均して10点前後の増加数にとどまってきたわけであるが、この理由としては、当館の常設展示における展示資料が展示替えを行いづらい実験装置を中心とした大型資料が多いこと、当館には展示・運営協力が設けられており（3）、企画展開催等にあたってはそうした展示・運営協力の支援をはじめとして展示資料を外部に依存してきた（依存可能であった）事

* 千葉県立現代産業科学館上席研究員

情が背景にあったものと考えられる。

ところで、平成 16 年度からの受入資料点数は著しく増加している。平成 16 年度に 596 点、同 17 年度に 163 点、同 18 年度に 289 点という具合であり（寄託資料も含む）、この 3 年間においては、寄贈者（寄託者）からまとまった資料の寄贈（寄託）申込が続いた結果であった。といっても、その内訳を見ると、平成 16 年度の「原川電気店資料」（538 点）、同 17 年度の「小久保コレクション」（132 点）、同 18 年度の「佐々木コレクション」（279 点）がその大半であり⁽⁴⁾、この三つの資料群で収蔵資料点数がほぼ倍増することになったことは、当館の収蔵資料に関して一つの特徴を与えることになったといえる。

つまり、この直近 3 年間で新たに収蔵された上記の三資料群のうち、小久保コレクションと佐々木コレクションは、どちらもカメラ（クラシックカメラを含む国内外のフィルムカメラ＝銀塩カメラ）中心の資料群であったことである。当館も理工系博物館である以上、「産業に応用された科学技術」をテーマとするだけに、わが国の産業発展の一端を示す製品・商品及びその関連資料を収集・保存することはその使命といえようし⁽⁵⁾、収蔵資料の充実を通して当館の展示展開の多様性を導き出せば、企画展においても収蔵資料を軸に構成でき、より多くの入場者に足を運んでもらえるような当館の新側面を打ち出すことも可能となろう。こう捉えると、カメラコレクションもまた今日のカメラ大国となったわが国の産業発展の一端を示す重要な資料群であり、当館の収集方針にも合致した資料群ということができる。

前置きが長くなったが、今回の小稿では、当館の収蔵資料の一端を紹介するとともに今後の収蔵資料の有効活用を図るため、「小久保コレクション」（一次受入分）⁽⁶⁾と「佐々木コレクション」の目録（一覧表）公開を行うものである。これを思い立った契機は、上記二つのカメラコレクションのうち、佐々木コレクションについては整理終了後の平成 19 年 2 月 17 日～3 月 18 日に収蔵資料展「昭和のクラシックカメラ - 佐々木コレクシ

ョンから -」を開催しているが（写真 1）、展示で紹介できたのはその一部（50 点）に過ぎなかったため、その全てを紹介してほしいという声が来館者から寄せられたことであった。もっとも、カメラコレクションと言っても、コレクター個人の趣向に沿った収集資料群であることから、内容や時期の偏在等は避けられない。しかし、当館にどのようなカメラが収蔵されているのかを一般に公開することにより、当館における今後の資料収集方針の一助にするとともに、収蔵資料の活用につながることを期待できよう。



写真1：収蔵資料展「昭和のクラシックカメラ」会場入口風景

なお、受入順では、平成 17 年度の小久保コレクション、翌 18 年度の佐々木コレクションということになるが、後述するように佐々木コレクションの調査開始が先であるため、本報告ではまず佐々木コレクション、次に小久保コレクションについて述べ、最後に目録（一覧表）をまとめて掲載していることを最初にお断りしておく。

2 佐々木コレクションについて

(1) 整理経過

佐々木コレクションは、福井県坂井郡三国町（現坂井市）所在の真宗高田派の称名寺住職であり教員でもあった故・佐々木智夫（のりお）氏（以下、佐々木氏と略す）が長年にわたって収集してきたカメラ及びその周辺資料（交換レンズ・ストロボ等）からなる資料群である。佐々木氏は称名寺の跡取りでありながら小さい頃から機械工学への興味関心が尽きず、大学も工学系に進んだ異色の僧

侶であった（のちに寺を継ぐべく大学の仏教学部にも進学している）。以後自分の趣味として、精密機械としてのカメラ（クラシックカメラ）の収集は一生続くことになり、それが国内外を問わない龐大なカメラコレクションとして結実することとなった。総点数は279点である(7)。

当館が佐々木コレクションを受け入れる契機となったのは、佐々木氏の逝去によりそのカメラコレクションの散逸が智夫氏の妻・須磨子氏を中心とした遺族により危惧され、智夫氏の長女が千葉県教育庁に奉職していたこともあって、「現代産業」を館名に掲げている当館にその受入に関しての打診があったことによる。

平成16年暮れの佐々木家側からの打診に対して、当館では早速収蔵の可否の検討に入り、その結果、受け入れる方向で対応することとなった。その理由としては、遺族が地元の博物館への寄贈・寄託を希望していないこと（地元博物館の受入対象資料に当てはまらないであろうとの判断による）、コレクターの逝去に伴いこのままでは個人（佐々木家）による資料保存には限界があり、資料劣化の恐れ等もあり得ること、当館としては現代産業資料として受け入れるに値する資料群であると判断されること（世界に一つの時代を築き上げたわが国におけるカメラ産業の発展のあゆみ及びその技術史を紐解く上で大いに参考となる外国産カメラも含めて一連の資料群として収集することは、現代産業科学館の目的に合致する）、今後の収蔵資料展等に十分活用し得ること、等が考えられる。ただし、その時点ではまだコレクションの詳細は不明であったため、整理した上で正式に受け入れることとし、当面は仮預かりとすることで双方が合意することとなった。

記録によれば、平成17年3月13日に当館に搬入して整理にとりかかっているが、その年の夏の博物館実習に際しては当時の実習生にも整理作業に参加してもらっている。この結果、同年9月には概ね整理を終えることとなったようである。受け入れ後の流れについては、館内連絡紙である千葉県立現代産業科学館資料調査班『収蔵庫だより』

第10号（平成17年9月12日）に詳しい(8)。作業次第を列記すると次のとおりである（一部表現改変）。

- ①開梱（現地の保管状況を踏まえて梱包・搬入したため、梱包の順番通りに開梱）
- ②資料名称の付与（モノの特定）
- ③計測・計量（レンズ交換ができないものはレンズまでを含めた幅・高・奥行の採寸。レンズ交換可能なものはボディーのみの状態で採寸）
- ④写真撮影（デジタルカメラによる1点ごとの撮影。スプリングカメラ等のレンズが格納されるタイプのものはレンズを引き出した上で撮影）
- ⑤タグ（資料識別票）取付（資料名・撮影番号＝データ管理上における写真の識別番号等の記入）
- ⑥データ入力（エクセル入力。記入内容は資料番号・資料名・メーカー・年代・寸法・概要・備考等）
- ⑦画像処理（デジタルカメラの画像のリサイズ）
- ⑧確認作業（タグに付与した撮影番号とデータ上の撮影番号との一致確認）

上記では漏れているが、①では清掃・不要物の撤去も行われているはずである(9)。また、この流れの延長上に評価額の設定（博物館資料として受け入れる場合には評価額を設定しなければならない）が行われ、その上で正式な受入手続きが行われることになる。

筆者は、上記①～⑧の作業が終えた段階の後に整理作業に加わったが（平成18年4月）、事務引継ぎでは、あとは評価額の設定と受入手続きのみということであった。しかし、やはり確認作業は必要である。デジタルアーカイブ(10)への掲載と前述の収蔵資料展の開催(11)とを考慮すると、まだ前任の整理担当者もほとんど手付かずであった資料内容の確認・調査は欠かすことのできない作業である。そこで各資料の見直しを行った結果、資料名の記載の一部に誤りが見られたり（例えば、後掲写真1の「ゾンネット・トロピカル」は、資料

名が「ツァイス・イコン」となっていたが、ツァイス・イコンはメーカー名であり、カメラ名ではない。しかし、カメラの名称はカメラボディに刻印されている場合が一般的であるので、そのカメラメーカー及び製品名を前もって知らない場合はその刻印されたものをそのまま資料名にしてしまうことは無理のないことといえる。カメラは工業製品ゆえにその名称が同じであっても部分的な違いで製造（発売）年代が異なってしまうため、その年代特定（これは資料名特定にもつながる）等に多くの時間を要することになった（現時点でも年代特定不能な資料の存在等、完全に解明できたとはいえない）。中小メーカーのカメラの場合は資料不足であることが多く、またシリーズ化等により類似資料が多ければ多いほど、資料名の特定をはじめとする内容理解に手間取ることになった。点数についても、例えば当初1点ずつ登録しようとしていたフィルムホルダーについて、まとまって残っている場合は同一のカメラに接続する可能性も否定できないため個別に数えることはせず、1点（1式）にまとめる等して調整することとした。そのような次第で、不完全ではあるものの整理時間が限られている関係もあり、おおよその概要が把握できたことを目処として内容確認をひとまず終了することとした。なお、資料整理にあたっては、コレクション搬入とともに当館に受け入れた佐々木氏旧蔵のカメラ関連書籍や雑誌類（『アサヒカメラ』や『カメラレビュー増刊』等）⁽¹²⁾及び佐々木氏作成の整理カード⁽¹³⁾が大いに参考になったことは言うまでもない。

次の作業は評価額の設定である。この点については、平成17年度に当館においてすでにペンタックスカメラ博物館（栃木県芳賀郡益子町所在）での調査が行われており、その際、ペンタックスカメラ博物館では「評価額の設定は、当該カメラは発売された時の定価を基本としている」との回答を得ていた（古いカメラで定価のわからないものについては不明のまま、近年の「オープン価格」についても「オープン価格」としてキャプションに記載しているとのこと）⁽¹⁴⁾。発売時の価格を評

価額とする根拠としては、実際の中古カメラ市場等での流通価格、つまり市場の実勢調査に基づくとなると、取り扱うマーケットやタイミングによって変動が著しいため、果たして正確に評価できるのか疑問だということのようである。そこで筆者もまずは定価調査から始めたが、外国産カメラが多いこともあり、当時の定価の判明は難渋を極めた。よって当館における評価額の設定根拠は、そもそも損失を被った際の賠償価格に通じるものでもあることから、現時点での実際の流通価格の方が評価額としてはむしろ適正なのではないかと方針を変更し、実際の流通価格を基に設定するようにした。詳細は省くが、流通価格に関してはネットオークションや中古カメラ店の価格情報等を参考にしている。またこの時、クラシックカメラに造詣の深い東京工芸大学教授の山田友治先生に大変お世話になったことを明記しておきたい。

以上の経緯で、当初323点とされたコレクションの総点数は279点（このうちカメラは223点。ただし枝番は除く）となり、寄託受入の事務手続きも平成19年初頭に無事終わることができた。これにより当初の予定通り、平成18年度中に収蔵資料展開催を含めた佐々木コレクションの公開にこぎつけることができたわけである。

（2）佐々木コレクションの概要

さて、佐々木コレクションの特徴については、気づいた範囲で以下のことが言えるであろう。

- ①カメラは、国産の128点に対して外国産が95点であり、外国産カメラの中では圧倒的にドイツメーカーのカメラが多い（75点）。しかし国別には幅広く収集されており、後述の③に掲げたトップ3を占めたメーカーをはじめとして18社分を集めたドイツを筆頭に、アメリカ（イーストマン・コダック、アンスコ、ボルシー等）、イタリア（ガリレオ、ベンチーニ）、オランダ（カンボ、リンホフ）、中国、フランス、スウェーデン、スイスの各メーカーのカメラに及んでいる。
- ②製造（発売）年代を見ると、昭和以降のものがほとんどであるが⁽¹⁵⁾、戦前（昭和20年ま

で)のものが約2割(ただし年代の特定できていないものは除く。以下同)を占め、年代別では昭和30年代のものが一番多い(全体の約3割を占める)。年代別の多寡は見られるとしても、その極端な偏りは見られない。なお、国産・外国産の別で見ると、前者は多い順に昭和30年代(約38%)、同50年代(約20%)、同40年代(約11%)であり、戦前のカメラの割合は約9%という分布であるのに対し、後者は大正以降の戦前のカメラですらに全体の3割以上を占め、昭和20年代までのカメラを含めると5割を超えている(因みに国産カメラで一番多い昭和30年代の割合は、外国産カメラでは約14%)。なお、年代が特定できた中で最も古いカメラは1921年(大正10)を発売初年(以下、発売年は発売初年を記載。また外国産カメラの場合は西暦を前に出す)とするドイツのゲルツ社製「ロール・テナックス」(番号:200604046)⁽¹⁶⁾及びアメリカのイーストマン・コダック社製「ベストポケット・オートグラフィック・コダック・スペシャル」(写真2)⁽¹⁷⁾であり、国産カメラでは昭和6年のモルタ合資会社(のちのミノルタ)製「ハッピー」(番号:200604001)⁽¹⁸⁾である。逆に一番新しいカメラはいずれもAPS(アドバンスド・フォト・システム⁽¹⁹⁾)カメラの平成10年のニコン製「ニュービスS」(番号:200604227)⁽²⁰⁾と富士写真フイルム製「エピオン1010MR C



写真2 ベストポケット・オートグラフィック・コダック・スペシャル(番号:200604135)

ティアラ ix-G」(番号:200604228)⁽²¹⁾であり、外国産カメラではドイツの1996年(平成8)のローライ・フォトテック社製「ローライ・プレーゴ90」(35mmカメラ。番号:200604221)⁽²²⁾となる。

③メーカー別の収集カメラ数トップ3は、国産・外国産別でそれぞれ以下のとおりである(前身・後身を含む)。

(国産)

1. ミノルタ(現コニカミノルタ) 18点
2. コニカ(現コニカミノルタ) 13点
3. マミヤ光機(現マミヤ・デジタル・イメージング) 11点

上記のほかに5点以上残されている国産メーカーは、富士写真フイルム(現富士フイルム。10点)、オリンパス(9点)、リコー(9点)、キヤノン(7点)、旭光学工業(ペンタックス)(6点)、ヤシカ(6点)、アイレス写真機製作所(5点)、東京光学機械(現トプコン。5点)である。

(外国産)

1. フランケ&ハイデッケ(現ローライフォトテック)※1(独) 23点
2. ツァイス・イコン※2(独) 20点
3. フォクトレンダー※3(独) 6点

※1) フランケ&ハイデッケ社は、一般にローライ社として有名(なお、ローライフォトテックのドイツ語読みはローライフォテヒクとなる)。

※2) ツァイス・イコンは、1926年(大正15年)にドイツのカメラメーカー4社の合併により発足。東西ドイツの分断時は東西にそれぞれ後身のメーカーが存在したが、ここでは煩雑を避けるためツァイス・イコン社の前身・後身メーカー分は合算していない。

※3) フォクトレンダー社は1969年にツァイス・イコン社に吸収合併されるが、※2)の理由もあり、国産におけるコニカミノルタと同様にここではツァイス・イコン社とは別扱いとした。

上記のほかに3点以上残されている外国産カメラは、イーストマン・コダック(米)(5点)、イハゲー(独)(4点)、ドイツ・コダ

ック (コダック AG) (独) (3 点) といったところである。

- ④国産カメラの中に、メディア等によくキヤノンと比肩されるニコン (旧日本光学工業) 製⁽²³⁾は 1 点 (しかも APS カメラ) しかない。またドイツの高級カメラメーカーとして著名なライカ社製のカメラも見当たらない⁽²⁴⁾。
- ⑤カメラの使用フィルム別⁽²⁵⁾では、35 mm (135mm) フィルムを使用するカメラが一番多いが (223 点中 88 点。全体の約 4 割を占める。ただしここでは 35 mm ハーフ判カメラは含んでいるが、同じ 35 mm 幅のフィルムを使うもののフィルム規格が異なるボルタ判カメラ等は除いている)、国産では 128 点中 57 点 (約 45%) であるのに対して外国産では 95 点中 31 点 (約 33%) である。これに続き多い中判 (ブローニー判) カメラは全体で 65 点 (約 3 割) であるが、国産で 34 点、外国産で 31 点であり、外国産では 35 mm カメラと同数となっている (なお、ここではセミ判カメラは含んでいるが、大判・中判兼用カメラは除いている)。3 番目に多いのはベスト判カメラであり、全体で 35 点 (約 16%。国産で 16 点、外国産で 19 点) 残されている。以上のことから、外国産カメラに関しては比較的古いカメラが多く収集されていること、また後述するように二眼レフカメラをはじめとする中判フィルム及びベスト判フィルム使用機の比率の高いことが、国産カメラに比べて 35 mm 以外のフィルム使用カメラの割合を高くしているといえよう。また、国産・外国産別で比べてみると、国産では 35 mm カメラの中に昭和 30 年代後半から 40 年代にかけて流行したハーフサイズカメラ (35 mm ハーフ判) が 8 点、戦後に超小型カメラとして流通した 16 mm カメラが 6 点、昭和 40 年代後半から 50 年代にかけて流行した 110 判カメラ (ワンテンカメラまたはポケットカメラとも) が 4 点含まれているところが目立っている。外国産ではロールフィルムが普及する以前に

主流であった乾板カメラが 5 点 (国産では 1 点しかない) 収集されていることが特に注目される。

- ⑥カメラの形態別では、古いカメラの形態に属するスプリングカメラやクラップカメラを含んだ折畳型カメラの系統⁽²⁶⁾が外国産カメラにより多く見られる (写真 3 参照。外国産では 32 点=約 34%、国産では 16 点=約 13%)。また写真 4 のような二眼レフカメラの系統⁽²⁷⁾では、わが国では昭和 20 年代から 30 年代にかけてのブーム⁽²⁸⁾もあり、国産・外国産がそれぞれ 20 点=約 16%、18 点=約 19% というようにある程度の収集量を誇っている。110 判カメラより小さい 16 mm カメラ (写真 5 参照) やスパイカメラとも言われたミノックス判カメラ、35 mm フィルムながら特殊な裏紙付きパーフォーレーションなしフィルムを使用するボルタ判カメラ、双眼鏡にカメラが付

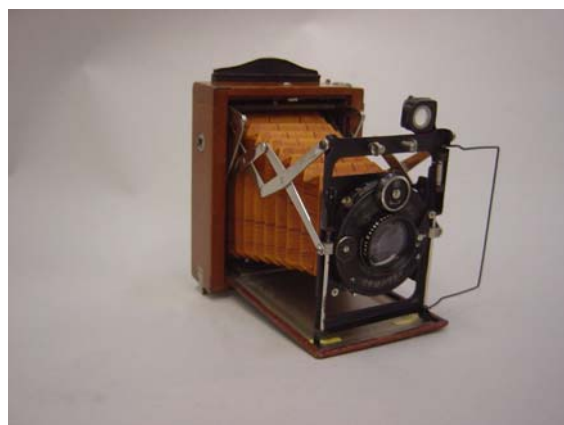


写真3 ズンネット・トロピカル (番号: 200604003) (29)



写真4 フジカフレックス・オートマツト (番号: 200604166) (30)



写真5 マミヤ16 (番号:200604018) (31)

属したタイプのカメラや首振り撮影のパノラマカメラ（フレームの上下をトリミングして横長に撮影するカメラとは異なる）等、独特の形状でデザイン的にも興味深いカメラも散見され、収集カメラの形態的多様性を指摘することができる。

⑦二眼レフカメラの中では、その代名詞的存在であるドイツの「ローライフレックス」及びその廉価版としての「ローライコード」の各シリーズが系統立てて収集されている（12点）(32)。年代順に並べると以下のとおりとなるが、「ローライフレックス」の初モデルである「ローライフレックス・オリジナル」が含まれていない点は残念なところである。

- 1) ローライフレックス4×4(ブラック・ベビー) (1932年)
- 2) ローライフレックス・スタンダード (1934年) (写真6)
- 3) ローライコードI (1933年)
- 4) ローライコードII (1936年)
- 5) ローライフレックス2.8B (1952年)
- 6) ローライフレックス・オートマツMX-EVS (1954年)
- 7). ローライフレックス4×4(グレー・ベビー) (1957年)
- 8). ローライフレックスT (1958年)
- 9). ローライマジックI (1960年)
- 10). ローライコードVb (1962年)
- 11). ローライフレックス3.5F (1966年)
- 12). ローライフレックス2.8GX (1987年)

※上記のうち「ローライフレックス4×4」のみベスト判二眼レフで、ほかは中判二眼レフ。「4×4」(ヨンヨン)は戦後のベスト判の流行により、名称は同じだが大改良して

再発売された。なお、当該資料は別名「ベビーローライ」としても親しまれている。なお、Arthur Evans『collection guide to Rolkei cameras』により、「ローライ」ブランドのカメラについてはシリアルナンバーによる細かいモデル分類が可能のため、同じ機種でもモデルが異なる場合、モデルチェンジ後の発売年（発売初年）を記録することとした。例えば、1)の「ローライフレックス4×4」(ブラック・ベビー)の発売初年（つまり「タイプ1」の発売年）は1932年（昭和7）だが、当該資料のシリアルナンバーや仕様によるとマイナーチェンジを重ねた後の「タイプ4」に属するモデルであることから、発売年は昭和9年となる。ただし、「3.5F」に関しては、『collection guide to Rolkei cameras』記載のシリアルナンバーでは1969年（昭和44）発売のタイプ4以降となるが、その特徴である220フィルム兼用機構となっていないこと及び撮影レンズがブラナーであることからタイプ3に属するものと推測される。しかし、シャッターカバーの社名が「Rollei-werke Franke&Heidecke」と表記されているので、タイプ3としても昭和37年以降のものであること、ローライ・ブランドのカメラ愛好者たちの「ROLLEI CLUB」HPでは当該資料のシリアルナンバーを1966年以降の発売としているので、ここではその記述を尊重して発売年を推定した。



写真6 ローライフレックス・スタンダード(番号:200604198) (33)

⑧カメラ以外のアクセサリ類では、交換レンズが21点残されている。マウントアダプターも6点残されており、撮影のためというより精密機械としてのカメラ（クラシックカメラ）を愛した智夫氏ということであるが(34)、撮影に関しても相当に凝っていたであろう様子が窺われる。

以上、思いつくままにカメラ資料を中心にコレクションの特徴的な点を挙げてきたが、これらを踏まえて総括すれば、佐々木氏によってほぼ昭和全期を通じたカメラの収集が試みられていることを特筆しておきたい。佐々木コレクションには、平成 10 年発売のAPSカメラまで含まれていることから、フィルムカメラに関してはほぼ大正末から平成に至るほぼ全時期を辿ることができる。前述のとおり、そのメカニックまたはデザイン面から工芸及び産業資料としてのカメラを愛し、収集対象としてきた佐々木氏だけに、戦前のドイツカメラの精巧なメカニック面に着目するとともに、昭和 30 年代以降はわが国のカメラ生産を世界に飛躍させた 35 mmカメラの進化の変遷にも注意を払っていた結果であるといえよう。

もう少し具体的に見ていこう。例えば、初の純粋な国産カメラである「パーレット」(写真7) (35) や現在に続く世界初のクイックターンミラー搭載

の一眼レフカメラである「アサヒフレックスII B」(写真8) (36) といったわが国のカメラ技術史を語る上で欠かせないカメラをはじめ、時代性を感じさせる「キンシI型」(写真9) (37) や高度経済成長期に女性向けというコンセプトで流行した「フジカミニ」(写真10) (38)、ユニークなカメラとしてはボディとフィルム部が分離する「マミヤマ



写真9 キンシI型 (番号: 200604095)



写真7 パーレット(番号: 200604097)



写真10 フジカミニ (番号: 200604021)



写真8 アサヒフレックスII B (番号: 200604040)



写真11 マミヤマガジン 35 (番号: 200604181)

ガジン 35」(写真 11) (39)等, わが国のカメラ産業発展のあゆみに足跡を残したクラシックカメラの枚挙にいとまがない。

外国産にしても, 古いカメラが多だけにアンティークでクラシカルなカメラがよく収集されている。二眼レフカメラは既述のとおり, ドイツの فرانケ&ハイデッケ社のものがよく集められている。また戦前のドイツの高級機カメラも目立つが, 一方でローコスト・カメラとして息の長い製造・発売が続いた「ボックス・テンゴール」及びその小型版であり戦前のベスト半裁判の流行を作った「ベビー・ボックス・テンゴール」(写真 12) (38), 「弁当箱」という愛称でわが国にも馴染み深い「アーガスC 3」(写真 13) (39)といった庶民的なカメラ, 一方で希少性のある異業種参入カメラ「アルパ・アルネア 5」(写真 14) (40), イタリアの斬新な縦撮りカメラの「コメットⅢ」(写真 15) (41)等といった形態的にも一風変わった資料も少



写真12 ベビー・ボックス・テンゴール (番号: 200604260)



写真13 アーガスC 3 (番号: 200604090)



写真14 アルパ・アルネア 5 (番号: 200604034)



写真15 コメットⅢ (番号: 200604050)

なくない。

以上はごく一部であり, ほかにも意匠・技術的に画期となったカメラをいくつも見出すことができる。このように佐々木コレクションを通観すれば, 一部欠けているメーカーはあるものの, できるだけ多種類のカメラをバランスよく収集しようとしていた故人の意志とその鋭いカメラ選択眼を偲ぶことができるであろう。

3 小久保コレクション (一次分) について

(1) 整理経過

小久保コレクション (一次受入分) (以下, 「一次受入分は省略) は, 市川市内に在住の小久保勝弘氏 (以下, 小久保氏と略す) が長年趣味で収集かつ使用してこられたカメラ及びその周辺資料 (交換レンズ・フィルム等) からなる資料群である。

小久保コレクションについては, 平成 17 年 10

月 19 日に小久保氏が当館に持ち込まれたことを契機として整理が始まり、整理作業は1か月ほどで終了している。つまり、佐々木コレクションよりも後から受け入れた資料群ではあるものの、資料内容・評価額設定等の関係から、小久保コレクションの方が佐々木コレクションより先に受入手続きが終了しているわけである。小久保氏が当館に資料を持ち込んだきっかけは全くの偶然であったようだが、その半年程前に佐々木コレクションの収集・仮受入を行っていたところであったことから、期せずして当館にカメラ関係資料が一気に蓄積されることになった。

整理作業経過に関しても、佐々木コレクションと同じように、館内連絡紙である『収蔵庫だより』第 11 号に詳しいが⁽⁴²⁾、各資料は小久保氏によって段ボールや紙袋にまとめて入れられ、資料によっては専用ケースに入ったままの状態当館に持参されている。当館では仮受入後、収納単位別の上から順に取り出し(拾い上げ)、まず清掃(クリーニング)を行っている。以下、次の手順で作業は進められている。

- ①資料名特定(整理当時はボディ等に記載されたメーカー名・シリーズ名をそのまま転記)
- ②計測・計量
- ③写真撮影
- ④タグ付け(番号付与。取り出した順に番号を付与)
- ⑤データ入力(資料名・製造番号・寸法・重量・付属物の有無・保存状況)
- ⑥画像処理(デジタルミュージアムでの公開も考慮)
- ⑦整理。箱詰め(クリアケースに保管)

順番の前後はあるものの、佐々木コレクションの整理作業と概ね同じ内容といえるであろう。また、この整理過程で取り外した電池、中に入れる対象のカメラが見つからないカメラケース、持ち込まれた際の段ボールといった梱包材等は、寄贈者の了解のもと廃棄されている。

小久保コレクションは佐々木コレクションと異

なり、カメラ(ボディ及びレンズ)単体で集積されたというより、その付属物も含めて集められているものが少なくない。しかもコレクションに占めるカメラ本体の割合を考えると、全体的にカメラコレクションというよりカメラ関係資料群と言った方が適切であるかもしれない。この場合、付属物として取扱説明書が残存していたりすると、当該資料の特徴や使い方を知る上で貴重な情報源となるので、筆者にとっても非常に有益であった。なお整理を行うにあたり、同じ機種(商品)であっても個別に資料番号を付している点は佐々木コレクションと同じである⁽⁴³⁾。

整理は1か月程度で終了しており、その後評価額の設定・受入の事務手続きが行われ、平成 17 月度中には公開が可能となっている。よって筆者は小久保コレクションの整理に直接関わってはいないが、小稿作成及びデジタルアーカイブへの登録のため、佐々木コレクションと同様にカメラの特徴等の把握を含めたコレクション内容の見直しを行った。そこで判明した範囲で資料名の修正や年代特定等も行っているが、ここでも前述の佐々木氏旧蔵のカメラ関連書籍や雑誌類を大いに参考にさせてもらったことをまずここで付記しておかねばならない。

(2) 小久保コレクションの概要

まず、整理作業を実際に行った前任者(植野英夫氏)による小久保コレクションに関する印象を以下に掲げてみよう。

「小久保氏の話しでは、昔から大衆機と呼ばれるカメラが大好きで収集してきたという。初号機や変わったカメラは必ず買うようにしていた。大分処分したが残ったものを寄附したいとの話しであった。愛着のあるものはジャンク品も購入したようで、その際の値札が貼付されたものもある。内容は、1950年代から1990年代にかけて、下記のような、クラシックなものや画期となったカメラ、すぐに消えていった機種を少なからず含んでいる。」(原文のまま)⁽⁴⁴⁾

以上の所見により、小久保コレクションの概要は簡潔に言い尽くされているものと思われるが、

この点についてももう少しコレクション内容に立ち入ってみると、筆者の気づいた範囲ではあるが、以下のことが言えようかと思う。

①小久保コレクション内のカメラは 68 点であり (8mmシネカメラ(45)の9点及びレンズ付きフィルム(46)の3点を含む)、そのほとんどを国産カメラが占める (55点。約81%)。そして 13 点収集されている外国産カメラの中では、アメリカ産のカメラが 10 点とその大半を占める。しかしアメリカ産といっても、その内訳はイーストマン・コダック社とポラロイド社の2社のカメラのみであり、前者はディスクカメラ中心 (7点中5点)、後者はインスタントカメラ (3点中3点) という構成になっている。シネカメラは全て8mmフィルム使用タイプのものであり、9点中5点は富士写真フィルム製 (「フジカシングル - 8」シリーズ) が占めている (写真 16 参照)。



写真16 フジカシングル - 8 AX100 (番号: 200503068) (47)

②製造 (発売) 年代的には全て昭和の、しかも戦後期以降のものである。最も古いカメラは昭和 25 年の小西六本店 (のちのコニカ) 製「パール I S R」(写真 17) (48) で、一番新しいカメラは平成 6 年の富士写真フィルム製のインスタントカメラ「フジ・フォトマ・スリムエース」(番号: 200503067) (49) である。年代的には昭和 40 年代が最も多く (21 点。約 31%)、次いで昭和 50 年代であり (17 点。25%)、この 20 年間のカメラ (シネカメラを含む) で全体の過半を超えている。



写真17 パール I S R (番号: 200503020)

③収集カメラのメーカー別のトップ3は以下のとおりである (点数の関係から国産・外国産を区別せずに掲げる。トップ3はいずれも国内メーカー。なお、その前身・後身を含む。また点数には8mmシネカメラ及びレンズ付きフィルムも含んでいる)。

(国産・外国産とも)

- | | |
|----------------------|------|
| 1. キヤノン※1 | 11 点 |
| 2. 富士写真フィルム※2 | 10 点 |
| 3. コニカ (現コニカミノルタ) ※3 | 8 点 |

※1) 8mmシネカメラ2点を含む。

※2) 8mmシネカメラ5点及びレンズ付きフィルム1点を含む。

※3) レンズ付きフィルム2点を含む。

④佐々木コレクションと同様、ニコン製は1点しかない。ただし、この結果は佐々木コレクションと同様に当該メーカーの収集を行っていないと解釈するものではなく、あくまで当館で受け入れたコレクションにおいての特徴である。

⑤カメラの使用フィルム別では、35mmフィルムを使用するカメラがやはり最多である (68 点中、ハーフ判を含め 36 点。全体の約 53%)。これに次ぐのは8mmシネカメラであり (9 点。約 13%)、さらに続いてそれぞれ5点 (約 7%) ずつのインスタントカメラ、ディスクカメラ、110判カメラが並ぶ。

⑥カメラの形態別では、昭和 20 年代の2点のみが撮影時にレンズが飛び出す仕組みにな

っているスプリングカメラ (写真 17 参照) であり, 昭和 30 年代以降のカメラは「ライカ」以降の普遍的な 35mm カメラの外観となったライカ判カメラといわれる形態のカメラがほとんどである (写真 18・19 参照) (50)。ただし, フィルム使用別と対応して5点ずつ残るインスタントカメラ (写真 20), ディスク



写真18 ミノルタ・ニューSR-1 (番号: 200503022) (51)



写真19 ニコンL35AF (番号: 200503018) (52)



写真20 ポラロイドSX-70ランドカメラ (番号: 200503029) (53)



写真21 コダックディスク 8000 (番号: 200503049) (54)



写真22 ポケット・かん・カメラ (番号: 200503060) (55)

カメラ (写真 21), 110 判カメラ (写真 22) については, それぞれそのフィルムの特徴を活かした個性的な外観のカメラが残されている。

⑦収集カメラには同種のカメラが多い。気に入ったカメラかまたは部品用としてであろうか, 複数残されている同じカメラを散見することができる (例えば「コダックディスク」シリーズや「キャノネット」等)。

⑧前述したとおり, カメラを単体として収集しているというより, 専用ケースや取扱説明書等の付属物のみならず発売時の箱ごと保存しているものも少なくない。また後述のフィルム以外にも未開封の資料も残されている。

⑨通常は使用後にカメラ店 (DPE店) に現像に出されて手元に残ることの少ないレンズ付きフィルムやインスタントフィルム, 110フィルム等の未使用フィルムの類もコレク

ション内に一部含まれている(写真 23 参照)。



写真 23 フジカラー写ルンですHi (24枚撮) (200503076) (56)

⑩カメラ以外では、写真 24 のような発光器(57)がよく残されている(10点。うち東芝製が4点、松下電器産業製が3点、なお、ウエスト電気製が1点残されているが、同社はのちに松下電器産業傘下企業となっている)。また、「ミノルタカードケース」(58)や「電池アダプ



写真 24 東芝BC発光器P - 3 II (200503096)



写真 25 [アルカリ電池・水銀電池変換アダプター] (200503123)

ター」(写真 25) (59)、「パノラマフレーム」(60)といった近年のカメラ利用に関する興味深い資料も残されている。

以上を踏まえて当コレクションを総括すれば、小久保氏の「大衆機と呼ばれるカメラが大好き」ということがよくわかる。年代的には昭和 40～50年代のカメラが中心であり、クラシックカメラというよりは、小久保氏の思い出や愛着に通じるカメラを中心とした「ネオ・クラシックカメラ」コレクションとでもいえようか。しかし、近年カメラが急速にデジタル化に移行し、フィルムカメラといわれる分野そのものがクラシカルな部類に入るのが確実な情勢下、やがてこれら「大衆機」といわれる個々のカメラを今後カメラ史の中にどのように位置づけていくのかもさらに検討されなければならないであろう。と同時に、カメラ操作の側面から考えれば、電化されたカメラの動的保存についても注意が払われなければならない。そのような見地に立って見た時、クラシック化する以前の、まだ評価が未成熟なカメラの体系的収集と操作方法の伝達保存もまた今後必要な作業になってくるであろうことを実感させる資料群ともいえよう。

4 おわりに

以上、当館に収蔵されているまとまったカメラ関係資料群として、佐々木コレクションと小久保コレクションに関するその整理経過と概要について紹介した。偶然といえば偶然であるが、両コレクションは一部に重なる資料があるとはいうものの、見事な補完関係にあるといえる。両コレクションを核に、今後も当館のカメラコレクションをさらに充実させていく必要がある。なお、両コレクションにどのようなカメラが収蔵されているかの詳細については、両コレクションの目録(一覧表)をご覧いただきたい。各目録には、判明した範囲で当該資料の特徴等も記しておいた。これにより、当館のみならず、館外においても今後有効に活用されることを切に望む次第である(寸法については紙幅の関係上割愛したが、館内のデー

データベースには記録されているので、必要があれば問い合わせ対応は可能)。なお、小久保コレクションについては冒頭で「一次受入分」と断ったように、その後追加受入(仮預かり)が行われている。今回の研究報告には間に合わなかったが、今後整理が済み次第目録公開の機会を得たいと思っている。また筆者はカメラを専門に扱ってきた者ではないので、本文や目録中における理解・記載内容等で誤りも多々あるかと思われる(実際、作成してみて途中で自ら誤りに気づいたカメラが幾つかあった)。そのような訂正すべき点は、多くの方々の御叱正等を得て今後修正・加筆してより正確な内容のものにしていきたいと思っている。今回の目録の公開が、当館における新たなカメラコレクションの集積や活用につながっていけば幸いである(61)。

ところで、今回のカメラ関係資料を扱ってみて改めて実感させられるのは、カメラが大量生産品であるとともに日々技術的に進化を遂げている工業製品であるということであった。一見同じと思えるカメラでも微妙な違いが見られ、その特定に手間取るカメラも少なくなかった。ただ、国産カメラについては簡便なところで、(財)日本写真機光学機器検査協会編刊『日本の歴史的カメラ』(昭和61年)が要領よくまとまっておき、より詳細には、すぎやまこういち・直井浩明・ジョンR・ブロック『国産カメラ図鑑』(ザ・クォータープランニング, 昭和60年), アサヒカメラ編集部編『昭和10~40年 広告にみる国産カメラの歴史』(朝日新聞社, 平成6年)等があり、かなり細かな意匠・機構の違いを確認することができた。しかし、種々雑多なトイカメラや広告にのらなかつた無名なカメラ等もあり、全てを捕捉することができなかつたのは悔やまれる。特に外国産カメラについては、筆者の知見不足でカメラ雑誌の特集記事(これはこれで大いに参考となったが)等を除いては網羅された図鑑・解説記事等を見出すことができず、一部不明なままのものがある。その点不十分な調査にならざるを得なかつたことは反省材料であり、今後も新たに情報を得てより充実したもの

にしていく必要がある。

最後に、両コレクションの収集・整理にあたっては、多くの方々の作業成果と協力があつたことは言うまでもない。佐々木コレクション受入に際しては佐々木須磨子氏、榎美香氏、小久保コレクション受入に際しては小久保勝弘氏にまず謝意を表せねばならない。貴重なアドバイスをいただいた山田友治東京工科大学教授にも改めてお礼を申し上げる。また当館の受入・整理に関与・協力した方々は、高木博彦副館長、坂本永上席研究員、植野英夫上席研究員、阿由葉司上席研究員、中松満始上席研究員、落合昭雄客員研究員(いずれも肩書きは当時)のほか、平成17年度以降の当館学芸課の面々等、こういった方々の努力・協力により上記二つのカメラコレクションは当館で大切に保存・活用されることになった。ほかにも当館へ博物館実習に来られた学生たちの協力なくしては、膨大な資料整理はさらに手間隙がかかつたことであろう。ここに重ねて感謝申し上げる次第である。

(注記)

- (1) 千葉県立現代産業科学館編刊『常設展示解説書』(平成10年)参照。
- (2) ここでいう収蔵資料とは、当館の場合、整理を経て資料審査会という内部審査機関を経て登録手続きを行つたいわゆる登録資料のことである。科学館という性格上、実物資料だけでなく実験装置類も登録しており、このため故障や新規代替装置の登録に伴い廃棄手続きをとつた資料もいくつか存在する。
- (3) 展示・運営協力会は、当館の展示活動における資料収集や調査研究に関する支援や協力を得ることを目的として設置されたもので、県内に本店・支店を有する企業や研究所、大学等から構成されている。会員数は平成20年2月末時点で84団体・個人となっている。なお、展示・運営協力会の設置目的については、「千葉県立現代産業科学館の設立の経緯と今後の方向性」(『千葉県立現代産業科学館研究報告』第1号所収, 平成7年)参照。
- (4) 「小久保コレクション」「佐々木コレクション」という表現は、一群の類似資料で構成された収集資料群

- であることにより便宜上仮に表現したものである。
- (5) 当館の資料収集・整理保存に関しては、前掲『千葉県立現代産業科学館研究報告』第1号所収の「千葉県立現代産業科学館の調査・研究について」において、「活発な調査研究活動や積極的な情報の収集を行うことにより、価値ある資料の発見、収集に努める」とある。また、当館の収集資料の分野としては、①産業領域②工学領域③理学領域④博物館学領域の4分野が挙げられているが、さらに細かく見ると、「②工学領域」には「・電気・電子関係（電信・電話・テレビ・ラジオなどの通信機器、電動機器・発電機器など強電機器、照明機器・電子管・真空管・半導体・コンピュータ・カメラなど）」と例示されており、カメラも収集対象資料となっている。「現代産業」を標榜する当館としては、わが国を代表する精密機器産業に成長したカメラ関係資料群の収蔵はとても有益なものといえよう。
- (6) 小久保コレクションについては、その後も複数回にわたって受け入れられており（仮受入）、今回紹介するのは整理が済んで正式に受け入れることとなった一次受入分のみである。
- (7) この点数には、当館での取り決めとして一括資料中で枝番処理されたものは除外されている（つまり、付属物等一緒に保存されている場合、点数は「1式」として個々の資料には枝番を付すこととなるが、あくまで点数は1点として扱う）。
- (8) 『収蔵庫だより』は、収蔵点数が一挙に増大したことに伴い、当館学芸課資料調査班が館内の情報共有を図るために作成したもので、平成16年度から2年間にわたって1～11号まで発行されている。佐々木コレクションの整理手順・経過等については、この館内連絡紙の内容に負っている。
- (9) カメラケースについては、保存状態の悪いものやどのカメラに適合するのか不明なものもあり、寄託者である須磨子氏の許諾を得た上で廃棄処分にしたものがある。なお、保管に際しては、カメラに適した環境下で保管するため、収蔵庫内にドライキャビネットを配置してその中に収納することとした。
- (10) 千葉県立の美術館・博物館各館の収蔵資料をインターネット上で閲覧できる「千葉県立美術館・博物館収蔵資料検索システム」により、現在各館の収蔵資料情報のデジタル化が進められている。このため単に資料名・資料番号・画像のみならず、資料内容についても情報を載せる必要があり、当然のこととして詳細な資料解析が求められている。
- (11) 平成18年度中における佐々木コレクションの受入手続き完了とこれを受けての収蔵資料展の開催は、平成18年4月の段階ですでにスケジュールとして決定しており、収蔵資料展に関しては平成18年度末の平成19年2月から3月にかけての開催が予定されていた。
- (12) 佐々木氏の所蔵していたカメラ関係書籍・雑誌については、当時の資料管理担当者の植野英夫氏が目録化している（千葉県立現代産業科学館資料調査班編『収蔵庫だより』第9号、平成17年5月22日）。
- (13) 佐々木氏が生前自らの収集資料を把握するために整理カードを作成・保管していたことは、現地に受入作業に入る前に佐々木氏の長女から当館に知らされ、またそのコピーも御提供いただいた。ここにはカメラ100点分とカメラ部品の一部のデータが記録されており、資料整理の際の参考とすることができた。ただし、当館で受け入れた資料に該当しないカメラも多く見られ、コレクション内で多少の資料の出入りがあったであろうことが推測される。
- (14) 植野英夫「資料管理等に係わる調査」復命書（平成17年12月11日作成）。
- (15) ここではカメラの製造年＝発売年（発売開始年）としている。しかし厳密には一つの機種でも実際は複数年にわたって製造されており、正確にはシリアル番号を照合して実際の製造年を特定すべきであろう。しかし、参照資料の制約もあって当該資料の実際の発売年特定までは不可能であるため、ここでは一部の特定可能であった資料（例えば後述の「ベストポケット・オートグラフィック・コダック・スペシャル」や一連の「ローライフレックス」シリーズ等）を除いて発売初年をもって当該資料（機種）の発売年に代えている。よって当該資料が実際に製造された年と本文または目録（一覧表）に記載の製造年とが必ずしも一致しない場合がある。この点は小久保コレクションにおいても同じである。

- (16) 1926 年 (大正 15 年) に他の 3 社と合併してツァイス・イコン社となったゲルツ社の製品。年代は『アサヒカメラ』1992・12 月増刊号 (朝日新聞社, 平成 4 年) 所収の田中芳郎編「リストアップ年表・海外のカメラ 1920~1965 年」から。同じゲルツ社の乾板フォールディングカメラの「テナックス」(番号: 200604005) も佐々木コレクションの中にあり, 形態的にはその方が製造年は古いと思われるが, 現時点では発売年を特定できなかった。
- (17) 一連のシリーズは「ベストポケット・コダック」として括られるもので, 1912 年 (大正元) から 1926 年 (大正 15 年) まで全世界で 180 万台も販売されたという大ベストセラー・シリーズ機。この間に細かな規格・意匠等の変更が度々行われており, 佐々木コレクションに残る 1 点は, ペンタックス・ギャラリー「コダックカメラの歴史」(『カメラレビュー』1980 年 7 月号所収, 朝日ソノラマ, 昭和 55 年) によると, レンズとシャッターの組み合わせから 1921 年 (大正 10) から 26 年 (同 15) にかけて発売されたものであることが確認できる。資料名はボディに刻印されたものを尊重した。なお, 「ベストポケット・コダック」の仕様変遷については, 秋林正「ベストポケットコダック」(『カメラレビュー別冊 クラシックカメラ専科 4 名機の系譜』所収, 朝日ソノラマ, 昭和 59 年) にも詳しい。なお, 「ベストポケット・コダック」は 127 フィルム使用機だが, 「ベストポケット」とは洋服のベストのポケットに入る大きさという事に由来する。「ベストポケット・コダック」の普及により, 127 フィルムをベスト判とも呼ぶようになった。わが国ではその単玉レンズの独特のボカシが重宝がられ, 「ベス単」の名で親しまれている。当該資料は, 当時としては珍しいオートグラフィック機能 (カメラ裏側に鉄筆の付いた蓋があり, 装填した専用フィルムに鉄筆で文字を書いて露光するとその文字がフィルムに写される機能) を搭載したものである。
- (18) 佐々木コレクションに残る国産カメラでは唯一の乾板カメラ。ミノルタの前身であるモルタ合資会社の製造だが, 浅沼商会から発売された。なお, 昭和 6 年発売は諸資料に見えるところだが, 昭和 8 年頃ではないかとの指摘もある (栗野幹男「戦前のミノルタカメラ」(『カメラレビュー クラシックカメラ専科 12 ミノルタカメラのすべて』所収, 朝日ソノラマ, 昭和 63 年))。
- (19) 「I X240」というカートリッジフィルムを用い, 撮影途中でのフィルム交換や撮影時の情報をフィルムに記録することを可能とした新システム。フィルム市場の開拓を目指して各メーカーが参入したが, 同時期に発売され始めたデジタルカメラの普及により早急に廃れていった。
- (20) 「ウーマンズ・ニコン」というキャッチフレーズで女性購買層を意識して発売されたスタイリッシュな APS カメラ。高性能 3 倍ズームレンズを搭載。撮影時はカプセル部をスライドさせてレンズ・ファインダー部を露出させる。
- (21) カメラ本体には「エピオン 1010MRC ティアラ ix」と刻印されているが, 「富士フィルムの歴史」(「富士フィルム」HP 所収) の年表コーナーによると, 「エピオン 1010MRC ティアラ ix - G」と紹介されており, 他の資料を見てもこの名称が正式のようであるため, これを資料名とした。「ニュービス S」と同じくスライド式カバーでレンズを保護し, カバーを閉じた状態での大きさは煙草 1 箱程度というコンパクトなカメラ。
- (22) レンズにはローライフォトテック社の HFT コーティング (高精密蒸着) が施され, 反射を抑えて演色性を際立たせた効果が得られることを謳った。姉妹機に「プレーゴ 70」「プレーゴ 30」等があり, 数字は焦点距離を示すものである。のちにデート機能搭載カメラも登場した。
- (23) 栗野幹男「国産中古カメラの楽しみ方」(『カメラレビュー別冊 クラシックカメラ専科 3』所収, 朝日ソノラマ, 昭和 58 年) によると, コレクターの中には特定メーカーに限定して収集している人も存在し, コレクション対象としてキヤノンとニコンはライカやツァイス・イコンと並んで人気が高いという。また, 『カメラレビュー別冊 クラシックカメラ専科 7』(朝日ソノラマ, 昭和 61 年) では「カメラコレクターのための国産カメラ特集」として, キヤノンとニコンを並べて紹介しているほどコレクターにと

っても両社はライバル関係にあるようである。

(24) 遺族からの聞き取りでは、佐々木氏は「ライカ」も収集していたようである。よってこの点については、佐々木氏が収集していなかったというよりも、当館受入のコレクションには含まれていなかったと解すべきである。

(25) 主なフィルム規格区分については、以下のとおり。乾板と大判以外はロールフィルムの範疇に入る。なお、この説明にあたっては「写真用語辞典」（「アマチュア無線局 J E 2 L U Z」HP 所収）及び「写真フィルム」（「フリー百科事典ウィキペディア」HP 所収）を主に参考にした。

○大判・・・一般に「シノゴ」といわれる 4×5 インチ（約 10×12cm）やその倍の大きさの 8×9 インチ（エイトバイテン）といったシート状フィルム等を指す。

○中判・・・120 フィルム及び 220 フィルムのことで、ブローニー判とも呼ばれる。画面サイズは 6×4.5 cm、6×6 cm（ロクロク）、6×7 cm（ロクナナ）、6×9 cm（ロクキュウ=フルサイズ）等があり、6×4.5 cm は特にセミ判として区別する場合がある。

○35mm・・・135 フィルムのこと。映画用フィルムから転用され、ドイツの高級機「ライカ」の普及により広まったため、ライカ判とも呼ばれる。画面が 24×36 mm で、デジタルカメラが普及する以前には一般的であったフィルム。通常パトローネという金属性保護具に収納されている。カメラによっては経済性を高めた画面 24×18mm で撮影されるものもあり、これを 35mm ハーフ判（ハーフ判またはハーフサイズ）という。

○ベスト判・・・127 フィルムのこと。画面 4×6.5 mm。またはそこから流用されて 4×4 cm（ヨンヨン）の画面等が得られるカメラもある。画面 4×3 cm のベスト半裁判は 35 mm におけるハーフ判と同様の考えによる 127 フィルムのさらなる経済的利用規格といえる。

○110 判・・・110 フィルムのことで、「ワンテン」と呼ばれた。画面は 13×17 mm で、一時流行したポケットカメラの使用フィルムと言えばこのフィ

ルムのことを指す。フィルムはカートリッジに収納されている。

○16 mm・・・映画用フィルムの規格であるが、カメラの小型化の中で写真用に応用された。画面は 10×14 mm が一般的だが、カメラによって若干違いが見られる。

○ミノックス判・・・スパイカメラとして有名な「ミノックス」シリーズ用のカートリッジ式フィルムだが、ミノックス社以外のカメラメーカーも対応機種を製造した。超小型カメラに用いられ、画面は 8×11 mm。

(26) 折畳型カメラとはフォールディングカメラといわれるものであり、携帯しやすいようにレンズにつながった蛇腹を折り畳むことでレンズをボディー内に収納できるカメラのことを指す。クラップカメラ（腕木またはパンタグラフ状の支柱によりレンズ部を折り畳むもの）やスプリングカメラ（前蓋を開いた際にレンズ部がスプリングの力で飛び出す形式のもの）もこの系統に属するが、今回の目録上においてはよりわかりやすく、クラップカメラ及びスプリングカメラの範疇に入らないカメラをフォールディングカメラとした。なお、フォールディングカメラをハンドカメラという場合もある（田中政雄「カメラの歴史」『カメラレビュー増刊 クラシックカメラ専科』所収、朝日ソノラマ、昭和 53 年）。この表現は、フォールディングカメラの登場がカメラを持ち運びしやすいものにしたことによる。

(27) 二眼レフカメラは、19 世紀中にも見られるが、今日一般に浸透しているイメージは、昭和 4 年の「ローライフレックス」（ローライフレックス・オリジナル）以降のものである。ファインダー用レンズと撮影用レンズが上下に並んだ外観が特徴であり、以後の二眼レフカメラはこの形態を模したものが大半であった（前掲田中「カメラの歴史」参照）。

(28) 昭和 27 年から 30 年にかけては J、U、X を除いて全てのアルファベットの頭文字が付く二眼レフカメラが発売されていたといわれるほどわが国でも盛んに製造されていた（白松正「戦後 50 年の日本カメラのあゆみ」『カメラレビュー クラシックカメラ専科 35 日本カメラ 50 年 特別号』所収、朝日ソ

- ノラマ, 平成7年]〕。
- (29) 合併してツァイス・イコン社となった旧4社のうちの1社であるコンテッサ・ネットル社の時代から作られていたカメラで、ツァイス・イコン社になってからも1931年(昭和6年)まで製造された。当該資料にはボディに「ツァイス・イコン」の刻印があるため合併後の製品である(発売初年は1926年となる)。橙色に近い茶色蛇腹が美しい一品。当該資料の製造年については、D. B. Tubbs 『Zeiss Ikon Cameras 1926~39』(HOVE CAMERA FOTO BOOKS, 1980年)を参照。
- (30) 昭和29年、富士写真フィルムにより製造・発売されたもの。もともとフィルムメーカーであった富士写真フィルムがカメラ生産に乗り出したのは戦後のことであり、中判スプリングカメラから製造を開始している。そして昭和20年代後半からの二眼レフカメラ・ブームの中、続けて発売されたのが当該資料である。当時の国産最高級二眼レフカメラと位置づけられ、70cmまでの近接撮影の実現や焦点調節とフィルム巻上のノブを兼用にして撮影の迅速化を図る等、かなりオリジナリティーあふれる高性能機と謳われたカメラである。子安栄信「富士写真フィルムのカメラのすべて」(『カメラレビュー クラシックカメラ専科44 富士写真フィルムのカメラ』所収、朝日ソノラマ、平成9年)では、富士写真フィルムの製造したカメラが網羅されているが、当該資料は同社唯一の二眼レフカメラのようである。また、当館での収蔵資料展開催時に当該資料を展示したところ、カメラコレクターの方がアンケートに「フジカフレックス、よく入手されましたね」と記入されていたことが印象深い。中古市場でもなかなか出回っていないカメラのようである。
- (31) 昭和24年にマミヤ光機製作所から発売された。セレン光電池による追針式連動露出計を内蔵し、マッチ箱のようなボディの上面に全ての機構と操作部品を集めたユニークな外観のカメラである。携帯時には透視ファインダーを引っ込めればレンズは自動的にカバーされてシャッターが切れない安全装置付きとなっており、フィルムの巻き取りとシャッターのセットも自動的に連絡しているという当時としては斬新なアイデアカメラ。「マミヤ 16」については、宮部甫『ミニカメラの世界』(朝日ソノラマ、昭和58年)ほかを参照。
- (32) 「ローライ」ブランドのカメラに関する情報については、Arthur Evans 『collectors guide to Rollei cameras』(CENTENNIAL PHOTO SERVICE, 1986年)に詳しい。もっとも、市販された「ローライフレックス」「ローライコード」等の二眼レフカメラは、大きく分けても40機種近くにのぼり、それぞれの機種のマイナーチェンジも含めると70以上を数える。
- (33) 「ローライフレックス・オリジナル」(発売初年は1929年)がその後のローライ・ブランド二眼レフの1号機であるが、117フィルム(120フィルムとフィルム幅は同じであるがスプール幅が少し狭い)を使用する機種であったため、120フィルム使用の1号機はこの「ローライフレックス・オリジナル」(発売初年は1932年。当該資料はレンズの仕様からタイプ3なので発売年は1934年)となる。村井龍一「ローライのカメラ」(『カメラレビュー増刊 クラシックカメラ専科』所収、朝日ソノラマ、昭和53年)では、「1932年に、前述のローライオリジナルの改良新型に専念した結果、ローライスタンダードが発表された。外観的にも機構的にも、まったく面目を一新した出来ばえであり、これが現在のローライフレックスの原形といえよう」と述べられている。
- (34) 佐々木須磨子氏からの聞き取り。
- (35) 昭和7年、小西六本店製。なお、「パーレット」は大正14年から発売されており、その後意匠や機構の変遷が見られる。当該資料は昭和7年型といわれるもので、これまでのボディは国産、レンズ及びシャッターは外国産という和洋折衷型であったものを、レンズやシャッターも国産部品を取り付けて純国産カメラになっている。この点については、浅見高史「パーレット」(『カメラレビュー クラシックカメラ専科10 小西六カメラの歴史』所収、朝日ソノラマ、昭和62年)を参照。
- (36) 昭和29年、旭光学工業製。今では当たり前の一眼レフカメラへのクイックターンミラー(撮影レンズに映る像をそのままファインダーに投影するためにボディ内に設けられ、シャッターの開閉直前にそれ

- ぞれミラーの上げ下げを一瞬で行うことで、一眼レフの欠点といわれた像の消失問題を解決した)を搭載したカメラはそれ以前からあるが、現在に続く 35mm一眼レフカメラのクイックターンミラー搭載のあゆみは、この「アサヒフレックスⅡB」から始まっている(高嶋鎮雄「アサヒフレックスⅡB」〔前掲『カメラレビュー クラシックカメラ専科 35』所収 参照)。
- (35) 昭和 16 年、理研光学工業製。ベスト半裁判カメラ。戦時中に発売された国産カメラの中の 1 点。名称は「金鷄」、つまり戦功が特にすぐれた陸海軍人に与えられる「金鷄勲章」からきている(酒井修一「郷愁のアンティークカメラ 世界編」〔『アサヒカメラ 1993 年 7 月増刊号』所収, 朝日新聞社, 平成 5 年] 参照)。昭和 17 年 10 月の販売広告には、「歩け秋の山野! 戦ひは続いてゐる 若人よ常に強く逞しくあれ いざゆかんカメラもて秋の山野へ」という勇ましいキャッチコピーが踊っており、時代を感じさせる(アサヒカメラ編集部『昭和 10 年~40 年 広告にみる国産カメラの歴史』, 朝日新聞社, 平成 6 年, 参照)。
- (36) 昭和 39 年、富士写真フィルム製。女性ユーザー向けに開発されたポケットやハンドバッグに入るお洒落な 35mm ハーフ判の露出計内蔵カメラ。フィルム感度が宝石風に表示されており、女性が好みそうな仕上がりになっている。発売当時のキャッチフレーズは「スマートに持ってスマートに撮ろう」。わが国のカメラ製造技術が工業デザインの的にも優れたものとなっていったことを示す一品といえる(前掲子安「富士写真フィルムのカメラのすべて」参照。また宣伝文句については、前掲『昭和 10 年~40 年 広告にみる国産カメラの歴史』参照)。
- (37) 昭和 32 年、マミヤ光機製。レンズシャッター式透視ファインダーカメラで、35mm のマガジンパック交換式としては国産唯一のカメラ。レンズ・距離計・フィルム巻上げレバーなどが一体となったレンズボディと、フィルム装填部・巻戻し機構が一体になったマガジンボディとに分離することができる。カラーフィルムの時代に先駆けて、中途でも白黒フィルムと即時に交換できることで話題を集めたが、売れ行きはよくなかったという(入沢久仁男「マミヤカメラのすべて レンズシャッターカメラ①」〔『カメラレビュー クラシックカメラ専科 36 マミヤのすべて』所収, 朝日ソノラマ, 平成 7 年] 参照)。佐々木コレクションには、カメラ本体とともに替えボディも残されている。
- (38) ローコストの箱型カメラ(ボックスカメラ)の代表格である「ボックス・テンゴール」は、1921 年(大正 10)にドイツのゲルツ社(ツァイス・イコン社の前身メーカーの一つ)から中判フィルム使用カメラとして発売されて以来、ツァイス・イコン社になってからも改良を重ねながら戦後に至るまで製造され続けている。当該資料はそのベスト半裁判用として登場し、当時のベスト半裁判の流行を切り開いた。1931 年(昭和 6)製。55×60×80mm という可愛いサイズで、レンズは単玉で固定焦点。1934 年(昭和 9)型になると前面にレンズを囲んで六角形の化粧板が付くようになる。なお、上記については片山良平「ボックス・テンゴール」〔『カメラレビュー増刊 クラシックカメラ専科 2 名機 105 の使い方』所収, 朝日ソノラマ, 昭和 55 年)を参照。
- (39) 戦前の 1939 年(昭和 14)から製造開始され、アメリカ人には「ブリック」(レンガ)という愛称で親しまれた 35mm カメラ。戦後も人気は衰えず、1966 年(昭和 41)まで製造された。長方形箱型ボディに様々なノブやボタンを付けたような外観であり、戦後、進駐軍がよく使用したので当時の日本人の憧れのカメラでもあったという。わが国では「弁当箱」という愛称で親しまれたカメラである(高嶋鎮雄・那和秀峻「20 世紀の名機 100 選」〔『カメラ年鑑 2000』所収, 日本カメラ社, 平成 12 年, ほか参照)。なお、鈴木八郎「アメリカのカメラ」(前掲『カメラレビュー増刊 クラシックカメラ専科』所収)では、「アーガス C 3」の発売年を 1946 年(昭和 21)としている。
- (40) 1952 年(昭和 27)、スイスのピニオン社製。45 度プリズムファインダー及び透視ファインダーを装備した優雅な外観のカメラ。世界累計でも 2,201 台のみが生産されたという希少性の高いカメラである(「アンティークカメラ」〔「オモカメワールド」HP 所収)

- 参照)。なお、山田友治氏からも生産台数の少ないカメラであり、市場価値も高い旨の評価を得ている。
- (41) 1953 年 (昭和 28), ベンチーニ社製、当該資料は、ユニークなアルミダイカスト製のベスト半裁判縦撮りカメラである。正面向かって左上の突起部がシャッターレバーで、その斜め下の分銅型ツマミを回すと側面そのものが外れてフィルム交換ができるという仕組みになっている。「コメットⅢ」に関しては藤島広一「ベスト半裁(3×4cm)判カメラカタログ」(『カメラレビュー クラシックカメラ専科 18』所収、朝日ソノラマ、平成 3 年)を参照。しかし、ここでは発売年代を「1950 (昭和 25) 年ごろ」として曖昧にしてあるが、「FOTOCAMERE ITALIANE」HP 及び「大日本クラシックカメラクラブ」HP での記述を尊重して今回の目録では 1953 年 (昭和 28 年) とした。
- (42) 『収蔵庫だより』第 11 号 (平成 17 年 11 月 17 日)。
- (43) ただし、後掲の小久保コレクション目録の「コダックディスク 6000」(番号: 200503052) のように 2 点で一式のものとして数えられたカメラもあり (一体のものとして保管されていた状態を前提として整理されたからであろう)、一部例外もある。
- (44) 前掲『収蔵庫だより』第 11 号内の「全体の所見」から。なお、「下記のような」とあるように、この印刷物で植野氏は「ウエルミー 6」(昭和 22 年)、「フジペット」(昭和 32 年)、「ミノルタ 16P」(昭和 35 年) 等 13 点を小久保コレクションの資料の一部として取り上げている。その例示基準は、日本写真機光学機器検査協会編刊『日本の歴史的カメラ』(昭和 61 年) に掲載されているものを中心としている。
- (45) 8mm シネカメラとは、8mm フィルムを使用した動画を撮影するためのカメラである。シネカメラの定義は「光技術用語辞典」(株式会社オプトニクス社 HP 所収) によれば、「正しく等間隔にあげられたスプロケット穴によって駆動され、長尺フィルム上に連続露光することのできるカメラ」ということになる。通常は「8mm カメラ」または「8mm」等と呼ばれるが、ここではスチールカメラと動画撮影カメラを特に区別する意味で「シネカメラ」の語を用いる。
- (46) レンズ付きフィルムは、一般に「使い捨てカメラ」等と呼ばれているが、メーカー側ではカメラの範疇には入っていない (水川繁雄「手軽に写せるカメラの代用品 写ルンです Hi」[前掲『カメラレビュー クラシックカメラ専科 35』所収] 参照)。しかし、当該雑誌でユニークなカメラとして紹介されているほか、日本カメラ社の各『カメラ年鑑』にも「各種カメラ」の中で紹介されていることから、ここではカメラとして扱うこととする。
- (47) マガジン方式の簡易なフィルム装填を実現した「フジカシングル - 8」は、昭和 40 年の発売開始以来、シネカメラの大衆化に大きな役割を果たした。写真 14 は、小久保コレクションに残る「フジカシングル - 8」の中では最も古い「AX100」で、F1.1 という明るいレンズを搭載し、夜景や室内撮影も可能にした機種である (前掲子安「富士写真フィルムのカメラのすべて」参照)。
- (48) 明治 42 年以来、小西六のカメラ名称として親しまれてきた「パール」の名が同社のスプリングカメラにも使われるようになったのは昭和 8 年のことである。昭和 13 年以降はそれまでの 6×9cm 画面から 6×4.5cm 画面のセミ判カメラである「セミパール」とその後継機種のみが製造されるようになり、昭和 24 年以降はセミ判でも名称に「セミ」が付かない「パール I」が製造・販売されるようになった。当該資料は軍艦部を見ると「Pearl」の刻印だけであり、「パール I」または「パール I 型」(「パール II」以降と区別するため後年「I」が付けられた) と錯覚しやすいが、ホットシューや吊革の有無等に外観の違いがある。この点については、山脇邦男「パール・セミパール」(前掲『カメラレビュー別冊 クラシックカメラ専科 4 名機の系譜』所収) により、「I」と「II」の間に製造・発売された「パール I RS」(パール I RS 型) であることが確認できた。「RS」とは、この機種に搭載された「コニラピット S」(F 接点シンクロ付きシャッター) の名前からきている (なお、このカメラ名も後年それまでの「I」と区別するために名付けられたものであることは、軍艦部の「Pearl」のみの刻印から窺うことができる)。
- (49) 富士写真フィルム社は、昭和 56 年からインスタントカメラ市場に進出している。「フォトドラマ」の愛称で統一された一連のシリーズは平成に入って以降も製

- 造・発売され続けている（平成10年以降は「チェキ」の愛称で売り出された一連のインスタントカメラがヒットしたことは記憶に新しい）。当該資料の特徴は、携行時等における折り畳んだ状態で薄さ39mmという超薄型設計にある。そのスマートさと画質の良さ（新型インスタントカラーフィルム「ACE」を使用）を売りにしたインスタントカメラである。富士写真フィルムのインスタントカメラについては、前掲子安「富士写真フィルムのカメラのすべて」参照。
- (50) 35mmカメラには、機構的にはレンジファインダー式（撮影レンズに連動するレンジファインダーを通して像を結び焦点を合わせる）に対する一眼レフ式（撮影レンズの像そのものをファインダーを通して見て焦点を合わせる）、及びシャッターの設置位置を基準としたフォーカルプレーンシャッター式（フィルム面の直前にシャッターがある）に対するレンズシャッター式（レンズ付近またはレンズそのものにシャッターがある）といったようなより細かい分け方もあるが、ここでは煩雑さを避けるためにフィルム以外に種別としてのこのような細分化は行わなかった。
- (51) 昭和40年、ミノルタカメラ製。ミノルタ初の35mm一眼レフカメラ「SR-2」（昭和33年）の普及機として昭和34年に登場した「SR-1」（レンズをF1.8からF2へ変更し、シャッタースピードの1/1000秒を除去した）の新バージョン。実はこの間の昭和36年にレンズをF1.8、外部装着連動露出計がCdS式になった改良版が発売されている。当該資料はこれを受けてボディをよりコンパクトにしてさらに改良を施したもの。なお、一眼レフカメラの形態的特徴は、正面上方の大きなペンタプリズム・カバーの存在にあるといえる。
- (52) 昭和58年、日本光学工業製。ニコン初の透視ファインダーカメラ（コンパクトカメラ）。世界初の暗所でのストロボ自動ポップアップ&発光機能内蔵ストロボ付きオートフォーカスカメラで、「ピカイチ」の愛称で発売された。一眼レフ製造メーカーのイメージが強かった当時の日本光学工業がコンパクトカメラの分野に進出したということで、カメラユーザー間に衝撃を与えたカメラともなった（豊田堅二「ニコンファミリーの姉妹機たち」〔「ニコン」HP所収〕
- ほか参照）。コンパクトカメラと呼ばれるカメラの場合は、一般にレンズ交換できないタイプが多く、レンジファインダー方式が主流であるという。
- (53) インスタントカメラは、「ポラ」「ポラロイド」という表現でも通用するように、その歴史はアメリカのポラロイド社のあゆみと重なる。各社がインスタントカメラの分野に進出する中、折畳式一眼レフのインスタントカメラという画期的な構造と色鮮やかで迅速な仕上がりの「SX-70」フィルムを使用する「SX-70ランドカメラ」を1972年（昭和47）に発売。その後、自動焦点のための超音波発信ソナーを付ける等独自の進化を遂げている。当該資料はその最終モデルで、1979年（昭和54）に発売。前身モデル「SX-70ランドカメラ・ソナー・ワンステップ」以来の独特の円形ソナー窓が特徴的である（「SX70フォーエバー」HP参照）。
- (54) ディスクカメラは、アメリカのイーストマン・コダック社がカメラの一層の小型化・軽量化を図って開発したもので、画面が8.2×10.6cmのフィルム15コマを放射状に配列し、1枚撮影するごとに回転して次のフィルムを撮影することができる仕組みになっている。カートリッジ・タイプで装填が容易であり、カメラボディーもこれまでになく薄くすることが可能になった。対応するカメラとして1982年（昭和57）に「コダックディスク4000」「同6000」「同8000」の3機種が発売され、それぞれ差別化が図られている。いずれもリチウム電池で稼動。固定焦点式で一定の明るさ以下になると自動的にストロボが発光する。「4000」は一番簡単なモデルで、「6000」になると接写機能が付き、写真の「8000」になるとセルフタイマーとデジタル時計も内蔵されている。わが国でもミノルタ等追随したメーカーもあったようだが、結局普及しなかったようである（前掲宮部『ミニカメラの世界』ほか参照）。
- (55) 110判カメラといえば、薄い長方形の箱型をしたポケットカメラのイメージだが、フィルムの小ささをうまく利用し、35mmカメラをそのまま小さくしたような外観のカメラ（番号：200503056の「ポケットフジカ・フラッシュAW」）、おもちゃのミニカメラ（番号：200503054の「パチパチくん」）といった様々な

- 形状のカメラを見ることができる。昭和 54 年に清涼飲料水メーカーが販売促進のために作らせた写真のカメラもそういったユニークな 110 判カメラの一つであり、外観を 250ml 缶に似せて作らせている。なお、同じ缶カメラ (缶型カメラ) でも 35mm フィルム使用のカメラが小久保コレクション内に存在する (番号: 200503059)。
- (56) カメラを忘れても現地で手軽に調達できることをコンセプトに、富士写真フィルムが昭和 60 年に発売を開始したレンズ付きフィルムだが、当初は携帯性を重視してか 110 判フィルム使用であった。しかし、昭和 62 年に写真のような 35mm フィルム使用モデルとなると、写りが良くなったこともあって爆発的に売れ出すことになる。フィルム品質の向上と高精度のプラスチックレンズの生産等、技術の進歩が使い捨て時代の要請と見事にマッチした例といえる (前掲水川「手軽に写せるカメラの代用品 写ルンです Hi」参照)。
- (57) フラッシュガンともいう。閃光 (せんこう) 電球を取り付けてストロボ普及前のカメラの照明としてよく使用されたもので、小型のアンブレラ状のものを広げて暗所・夜間等での撮影に用いたものである。
- (58) 重要なのはこのケースに収められるインテリジェントカードである。ミノルタカメラが昭和 63 年に発売した「ミノルタ α - 7700i」にあわせて発売され、このカードの情報をカメラに読み込ませることによって同機のインテリジェント AF 一眼レフという特長をさらに補強することとなったもの。小久保コレクションの「カードケース」4 点中の 1 点 (番号: 200503117) にインテリジェントカードが 3 点残されており、それぞれ「SPORTS」(激しい動きの被写体をブレなく撮影)、「PORTRAIT」(最適な被写界深度を得られる絞りを設定して立体感を出す)、「CLOSEUP」(マクロ的にシャープに接写できる) という各々のシチュエーションでの最適な撮影機能をメモリカードによりカメラにインプットさせるという仕組みになっている。このようなメモリカードの開発は、現在に続くカメラの高性能化、電子頭脳化の一階梯と捉えられよう。なお、この説明にあたっては、コニカミノルタホールディングス「カメラヒストリー」(同社 HP 所収) 内の「ミノルタ α - 7700i」の解説及びにしきん「インテリジェントカードシステム」(「ミノルタカメラくらぶ」HP 所収) を参照。
- (59) 電池アダプターの登場は、水銀電池の製造中止に伴うものである。カメラの製造技術の高度化によって EE (Electric-Eye) 化・AF (Auto-Focus) 化が促され、そのため電源の確保が必要となった。しかもカメラの小型化が軽量化・多機能化をもたらし、そのため放電特性がよくボタン型電池に加工しやすい水銀電池が多用されるようになったが、地球環境保護のために製造が中止されると、カメラの使用継続が困難となる問題も生じることとなった。この点においては非電化カメラに比べて電化カメラがその永続性において弱点を抱えていることを私達に知らせてくれる。この問題解決の一助として中古カメラ店がこうしたアダプターを製造したことは興味深く、これにより顧客ユーザーの不便を取り除こうとの業者側の苦勞の跡が推察できる資料である。
- (60) わが国で平成に入って流行したパノラマ撮影とは、35mm フィルムを上下にトリミングして横長に写すというものであり、その流行にあわせるように国内メーカー各社も競ってパノラマ撮影対応カメラを発売している。しかし既存のカメラでも「パノラマフレーム」というアダプターを取り付けることで、パノラマ撮影が可能となった。それぞれの機種にあわせた「パノラマフレーム」が発売されている。
- (61) 佐々木コレクションの収蔵資料展の開催にあたっては、展示をご覧になられた方から資料寄贈の依頼が相次ぎ、実際に新たに数件のカメラの受入を行うことになった。アンケートに「自分はこのようなカメラを持っている。よろしければ寄付する」と、連絡先を書いていかれた方や電話での問い合わせもあった。当館がカメラ展を開催したことでカメラを収集 (収蔵) していることが周知され、新たな資料集積につながったことを実感する機会ともなった。今後もこのような展示・目録公開等を通じた PR 活動は必要であると考えます。